



Title	ドイツにおけるサッカーのプロ化 : 問題の把握とヘゲモニー論の射程
Author(s)	高津, 勝
Citation	研究年報, 1994: 3-6
Issue Date	1994-08-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/7309
Right	

1 . ドイツにおけるサッカーのプロ化

—問題の把握とヘゲモニー論の射程—

高津 勝

I. 「批判的スポーツ」論とサッカー批判

1970年代の旧西ドイツにおける「批判的スポーツ」論の旗頭の一人、Gerhard Vinnaiは、1970年に著した『イデオロギーとしてのサッカー』のなかで、政治・経済学的、社会心理学的な手法を駆使し、現代のサッカーを批判的に考察している。彼の最大の関心は、巨大な大衆的イベントとなったサッカー競技の産み出す「大衆的行動」「大衆的心理」、とりわけ、その「倒錯」し、「疎外」された姿にあった。

「サッカーグラウンドでの得点は、支配者の得点である」(①S. 7)。

この言質に集約されるVinnaiの批判的まなざしは、「余暇現象としてのスポーツ」「労働世界のコピーとしてのサッカー」「スポーツの補償的機能」「競技スポーツ(Leistungssport)としてのサッカー」「サッカーの商品的性格」「サッカーと社会化」「サッカーとナルシズム」「サッカーと攻撃性」等々、多様かつ包括的である。

論述の出発点において、Vinnaiは、サッカーを、したがって競技スポーツを、生産力の向上と社会的必要労働の減少、つまり労働時間の減少が生み出した「自由時間」と「娯楽産業」のコロラリーにおいて把握している。

その際、彼は、19世紀半ば以降のイギリスにおける8時間労働制の実施、週末と休暇の拡大、児童労働の廃止、すなわち、資本による絶対的剰余価値追求から相対的剰余価値追求への移行と、大衆スポーツとしての近代フットボール(サッカー競技 = Fußballspiel)の同時並行的進行という歴史的事実を念頭におきつつ、社会的に構造化された現代のサッカーを次のように理解するのである。

資本主義社会においては、自由時間は必要性に規定される。自由時間は、労働日の長さによってコントロールされる。大衆を操縦する技術が娯楽産業を発展させ、自由時間を直接的にコントロールする。組織的サッカーは、支配的現実の正当化原理(herrschendes Realitätsprinzip)の訓練とその固定化に役立ち、疎外された産業装置の犠牲者の興味を惹く産業の一部である(①S. 13)、と。

Vinnaiの場合、基軸となる方法的概念は、利潤率を前提とし、予測や計算を駆使し、形式的合理性を追求する「資本主義的合理化」である。それは、労働あるいは生産過程のみならず、交換と流通の過程、したがって、自由時間の領域にも貫徹する。

彼は言う。交換原理によって刻印された資本主義的生産装置の合理性は、量化された抽象性を徹底的に貫徹させ、それが一般的に機能することを許し、労働の局面だけでなく、自由時間、そしてまた、スポーツにかかわる人間と事物をも組織し、コントロールする。資本主義においては、商品は「全社会的存在の普遍のカテゴリー」(①S. 16)になる。商品交換の合理性は、社会と個人の全生命現象に貫徹する、と。

つまり、Vinnaiにおいては、競技の記録、得点、順位、最大の効率をめざす機械的練習や競技スポーツ(Leistungssport)における合理的運動行動、その習慣化・自動化、戦術的決定の迅速化は、生産性の向上とのアナロジーにおいて把握され、「資本主義的、技術的理性」(①S. 16)の顕現と見なされるのである。それゆえ、彼は「労働力の搾取をより強化するための、資本の利益の範囲内で生産技術を合理化する、計算づくの理性が、サッカーに競技スポーツとしての特定の性格を与えた」(①S. 28)と規定する。

さらにVinnaiの考察は、「技術的理性」にとどまらず、組織的合理化にまで及んでいる。すなわち、資本主義的分業がマネジメントの官僚化を推し進め、人間は管理の対象に引き下げられ、それと符合するかたちで組織的スポーツ活動もまた、官僚的に組織された制度に変質する、と。

資本主義的な組織的合理化は、スポーツのプロ化の過程にも貫徹する。なぜなら、最高位を競うアマチュアクラブは、プロ化を余儀なくされ、その結果、アマチュアクラブはプロリーグの下部組織に編入され、競技および経済的な成果を求めめる過程で、全構造的な変化を被るからである。そこでは、アマもプロも、ともに遊戯的な魅力を失い、大都市のトップクラブや少数の大クラブがサッカーの話題を独占し、観衆と有能なプレイヤーを奪われた弱小クラブは、活力を減退させる。

それだけではない。資本主義社会においては、人々は商品の所有とのかかわりで社会的過程を営んでおり、精神的生産物は市場を介して分配される。そこでは、経済の集中が、情報と思想を操作する独占的な情報メディアへと導き、文化産業は、利潤原理にのもつて相対的な自治を自ら破壊する。

文化商品は、利潤チャンスに方向づけられており、自治的主体およびその意識とは合致しない。

II. 統合と自律

～労働者文化・地域文化の可能性～

Vinnaiは「資本主義的合理化」をキーワードにし、この概念を生産・流通・消費の全過程の分析に用いつつ、サッカーの社会的存在形態を論理的・体系的にとらえようとした。それに対し、Rolf LindnerとHeinrich Th. Breuerの研究は、ルール地帯のサッカーの社会史的な考察をとおして、労働者文化、あるいは地域文化の視座から、その可能性と限界を歴史的に把握しようとしている。

労働者とサッカーの関連性に関するLindnerの理解は、Vinnaiのそれと異なり、歴史内在的である。すなわち、Lindnerは、サッカーが1920年代にルール地帯の鉱工業労働者に急速に普及して社

会的な基盤を獲得し、1928年には Gelsenkirchen を本拠地とする労働者中心のサッカークラブ「FC Schalke 04」がドイツ選手権を獲得するに至った理由について、さらに、その伝統と競技力の地域的基盤が1950年代まで持続したことについて、次のように述べている。

第1に、労働者のサッカーは、当初、ブルジョアからは野蛮なプレイだと批判され、左翼からは「能力主義原理」(Leistungsprinzip)の受容だと見なされた。だがサッカーは「成績」(Leistung)を抜きにして考えられない。サッカーに要求される「筋力」「激しさ」「持久力」は、工場労働者が身につけねばならない特性であり、工場労働者の人格的アイデンティティの構成部分であった。効率的な作業能力(Leistung)や活動の目的性は、工業労働者の生活現実であり、労働過程で獲得した能力のサッカー場での転移が、労働者階級出身チームの高度な競技力を保障したのである。

こうしてサッカーは、産業文化として工業労働者の公共的生活の構成部分となり、労働者居住地区の人間関係とコミュニケーションを構成し、クラブとそのチームは、文化代表として地域的アイデンティティの担い手となった(②S. 21, S. 23)。

第2に、1920年代後半の「FC Schalke 04」をはじめ、労働者居住地区のスポーツクラブのドイツサッカー連盟(DFB)内での活躍は、ブルジョア的なスポーツ活動の枠内での労働者階級の架空の勝利を意味した。それらのクラブは、ブルジョアスポーツの内部での労働者文化の「共同の代理人」、「統合された代表者」であった(②S. 52)。より高い競技クラスへのクラブの上昇は、ブルジョア社会のなかでの「共同の上昇」として思念されたのである(②S. 59-60)。その意味では、支配的文化による「イデオロギー的同化」に対し、十分に抵抗力を行使しえなかったといえよう。

けれども、著名なキッカーは、友人・仕事仲間・隣人・親戚縁者と共にプレイし、労働し、生活した。クラブは職場・居住地区・余暇生活・観衆と密接に繋がっていた。

そこには、労働者居住地区の特徴である階級的に同質な「家族的伝統」、集団的・連帯的態度が存在し、著名なプレイヤーは、現役期間中、一貫してクラブに忠実であり続け、ローカルな英雄・地域労働者の代表として隣人と生活をともにした。

クラブ自体が、地域住民の連帯の表現であり、著名なプレイヤーは、その象徴であった。

Ⅲ. サッカーのプロ化と文化的ヘゲモニー

ルール地帯を事例にした、Lindner 等によるサッカーの社会史研究のもう1つの重要な成果は、1963年のブンデスリーグの結成で頂点を迎える「プロサッカー」の合法化・制度化の過程と、そこにおけるトップレベルのサッカーの存在条件の根本的な変化を、社会的・文化的ディメンションにおいてとらえ、その問題性を Gramsci のヘゲモニー論とのかかわりで指摘したことである。

Lindner によれば、経済的条件やテレビや自動車の普及などの社会的変化を別にすれば、構造的な転換の第1の契機は、1956/57年の契約選手システムの確立、すなわち副業として、非専門的にサッカーを営む有給プレイヤーの合法化であった。以後、クラブと地域の経済力が競技力を大きく規定するようになり、1955年と57年の石炭危機によってルール地帯の労働者の近郊クラブが衰退し、50年代末にはクラブの合併・選手の引き抜きによる寡占化が進行した。

1963年、商業化とプロ化を連動させつつ、フルタイムの職業プレイヤーの登場とプロリーグの結成を迎えるのである(②S. 76, S. 83)。

第2に、サッカーの商業化・寡占化・プロ化とは、単にサッカーが「興行スポーツ」(Schau-sport)として娯楽産業の一部に編入されることではない。それを越え、サッカーが製造業・マーケティング・広告・CI活動など、他の産業部門の活動と複合的に結びつくことを意味する。ここでは、資本のもとへの全生活領域の包摂(Marx)が、経済的のみならず文化的ディメンションにおいても、特定の方向性をもって貫徹する。

その方向性とは、かつて「労働者文化」の要素を保持していたサッカーが「無階級的」なものになったとか、労働者がブルジョア階級のメンバーとしてサッカー競技に「参加」することが社会的に受入れられたということではない。むしろ、Gramsciの言う「ヘゲモニー」、すなわち強制ではなく、同意にもとづく支配のことである。

労働者や観衆がサッカーをとおして「ヘゲモニー」を受け入れることは、「スポーツとしてのサッカーの魅力をそのままにしておき、しかし、同時に、彼等の文化的源泉を奪い取り、彼等と結びついている社会的・文化的ディメンションを切り取ることである」(②S. 89)。

いまや、外面的な「大衆文化的スペクタクル」(Massenkultur-Spektakel)の理念によって刻印されたサッカーは、「支配的な経済的・文化的勢力の部分的自治(Teilautonomie)となり、民衆文化(Volkskultur)の構成部分としての自治的要素を失う」(②S. 94)。

Ⅳ. ヘゲモニー論の射程

「資本主義的統合は、常にますます全面的になるから、文化革命のディメンションのない解放闘争は敗北する。(中略)全社会的解放を部分的に先取りした諸組織の中でのコミュニケーション、共生、共同労働の変化した諸形態のみが、抵抗のための精神的エネルギーを自由にする」(①S. 105)。

これが「批判的スポーツ」論にもとづく Vinnai のサッカー分析の「実践的結論」であった。

それに対し、Lindner は、70年代後半にベルリンやルール地帯に登場した自前のイニシアティブによる「自由時間チーム」(Freizeitmannschaft)、すなわち生活条件・居住区・育成歴を共有する者たちが作った、業績プレッシャー・年齢制限・強制トレーニングのない、平等・同権・共同決定を重視するスポーツ集団の存在に注目し、それを対抗運動として位置づけ、そこに展望を見出している(②S. 141-147)。

だが、我々は、Vinnaiの構想する「解放」と

「抵抗」の組織にも、Lindnerの対抗運動にも、理論的・実践的なスケールにおけるある種の狭さと、孤立化の傾向を感じざるをえないのである。

なぜなら、彼等の抵抗・対抗の構えは、幾分、硬直しており、支配的文化に対する変革の側のシフトについても、全面的ではないからである。

そのことは、イギリスの社会学者 Hargreaves にも共通するのであるが(③292)一、Lindnerによる Gramsciのヘゲモニー論の適用が、変革の側のヘゲモニー構築の可能性を展望しておらず、もっぱら支配階級・勢力の側のヘゲモニーに限定されていることから看取しうる。

しかし、Gramsciのヘゲモニー論は、文化を民衆の自己形成にかかわる問題としてとらえ、民衆の自律的な生活世界、あるいは政治社会に対する市民社会の自律的形成ととして、社会を再構成することをめざすものであった。その作業は、文化の批判的機能を介して生きることの意味を再構成し、文化の主体形成を展望することと不可分であった(④P. 167-203)。

ヘゲモニー論は、ヘゲモニー転換の展望と戦略を合わせもつことが求められているのである。

さらに、支配的文化、あるいは文化の総体的なあり方に対する変革のパースペクティブの広さ、豊かさという点では、「支配的社会制度と行動規範のなかの社会的統制と社会的規律、それらの文化的ヘゲモニーへの要求をつねに配慮しなければならない」としながらも、なお「支配階級の歴史ではなく、下からの歴史」を叙述しようとする Ritterの言説のほうが、Vinnaiや Lindnerよりも優れているように思える(⑤S. 3)。

Ritterは言う。スーパーマーケットや百貨店によって提供され、大量の公衆に向けられた広告によって常に方向づけられた大量消費が、そして興行的形態をとる大衆スポーツ (Massensport)一英国ではサッカーは労働者の境遇と結びついており、逆にドイツでは階級的な干渉を受けていたが、それと同じ方向をめざしており、そこでは、あらゆる社会階層からなる観衆の面前で、プロスポーツマンが絶えず生産される、と (⑤S. 9)。たしか

に、そこでは、大衆スポーツは娯楽産業および自由時間の商業化と同じ方向で作用するものとしてとらえられている。

だが、いま、ここで我々がRitterに注目する所以は、大衆文化の「階層を越えて広がるごた混ぜの性格」を最初から予断を持って否定的に評価するのではなく、そこにおける労働者の文化的貢献を明らかにしようとする彼の方法的態度と、社会全体の文化的な展開のなかに、統合を妨げている現実・契機・条件を見極めようとする彼の視座(⑥S. 29-30)を重視するからである。オルタナティブは、その社会の総体的な文化状況・構造を鳥瞰する位置に立つ必要がある。

[注]

- ① Vinnai, Gerhard: Fußball als Ideologie (Brückner, Peter/Krovoza, Alfred/Leithäuser, Thomas, Hrsg.: Veröffentlichungen des Psychologischen Seminars der TU Hannover), Frankfurt a. M. 1970.
- ② Lindner, Rolf/Breuer, Heinrich Th.: "Sind doch nicht alles Beckenbauers" Zur Sozialgeschichte des Fußballs im Ruhrgebiete, Frankfurt a. M. 1978 (3. Aufl., 1982).
- ③ ジョーン・ハーグリーブズ (佐伯聰夫/阿部生雄: 訳) 『スポーツ・権力・文化』不昧堂出版、(Hargreaves, John: Sport, Power and Culture. A Social and Historical Analysis of Popular Sports in Britain, Cambridge 1986)。
- ④ 松田博編『グラムシを読む～現代社会像への接近～』法律文化社、1990年。
- ⑤ Ritter, Gerhard A.: Einleitung. In: Ders. (Hg.), Arbeiterkultur (Neue Wissenschaftliche Bibliothek; 104: Geschichte), Königstein/Ts. 1979.
- ⑥ Ritter, Gerhard A.: Arbeiterkultur im Deutschen Kaiserreich. Probleme und Forschungsansätze. Ibid.